

---

k

黒鬼風斗

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

k

### 【Nコード】

N9024M

### 【作者名】

・黒鬼風斗

### 【あらすじ】

「悪魔の使者」と罵られる一匹の黒猫。クリスマスの日に彼が出会ったのは一人の若者だった。同情なんか嫌いだという黒猫の気持ちを余所に、若者は半ば強引に自分の家に連れ帰る。そこから暫く、奇妙な同居生活を送ることになるのだが……。

BUMPOFCHICKENの名曲、「k」をイメージして書いたものです。原曲の歌詞では悲しい終わりですが、本作ではハッピーエンドに挑戦しました。オリジナルな小説なので、皆さんお気軽にお読み下さいませ。

## 第一部 冬 「Holy Night」

雪が降っている。

無邪気にはしゃぐ子供の声も、夜になるとあまり聞こえなくなつた。

その代わりに、二人組みの男女が街中を歩き始める。

“クリスマス”という名の、何かの行事らしい。

……まあ、俺には関係ない話だ。

俺は振り返ると、再び裏路地の闇の中へと身を投じた。

k

くハッピーエンドVer. }

f r o m   B U M P   O F   C H I C K E N

W r i t t e n   b y   黒鬼風斗

1・冬 「Holy Night」

「きゃっ、黒猫！」

「シツシツ、ここはお前の来るとこじゃねエ。どっかに行かねエとぶつとばすぞー！」

それはこっちの台詞だ、と俺は不満を表現するために尻尾を振った。“ここ”はお前らが来るとこじゃない、“ここ”は俺のような嫌われ者が宿とする場所なんだ。

俺は少しの間そのまま二人の男女を睨みつけていたが、男の方がいきなり石を投げて来やがったんでとりあえずそれを難なく避けると、フ                      と牙を剥いてやった。

「ケツ、“悪魔の使者”が」

そう呼ばれるのも悪くない、と今ではすっかり開き直っている。そう罵声を上げた男の首からは、ドクロのペンダントがぶら下がっていた。……俺には理解できない。“悪魔の使者”である俺は罵るクセに、“死神”とかは大歓迎なのか？

まあ、人間のする事言う事なんて、別に理解したくもないが。俺は仕方なく新しい宿を探すために、その場を後にした。

裏路地はそういう奴らで一杯だった。暗いから、人があまり来ないからと言って、イチャイチャする“バカップル”が行く所行く所現れやがる。しかも、今度はセックス中と来たもんだ。いい加減、

頭にくる。

俺は勢い良く駆け、丸出しの男の尻を思いつきり引つかくと、そのまま走り去った。男の汚い逸物でも良かったのだが、俺の自慢の爪がそんな血に汚れるのは御免だったから、やめといた。後ろの方で男の絶叫が聞こえる。フン、良い気味だ。

そんなこんなで、俺は表通りにまで出てきた。眩しいくらい、夜とは思えないくらいに明るかった。今夜は裏路地で夜を明かす事は出来ないから仕方なく、“外の世界”で寢床を探すのだ。好きで、こんな場所に来るもんか。

「……見て見て、黒猫よ」

「ホントだー。不吉ね、今日は一年に一回しかないクリスマスなのに」

予想通り、人間とすれ違う度に罵声が飛び交う。石が飛んでこないだけマシだと、俺はまた開き直っていた。

行く宛てもなく、どれくらいの間歩き続けたんだろう。人混みも段々と少なくなり、俺に石をぶつけて来る奴も出てきた。さっき投げられた石は脇腹のあたりに直撃した。投げてくる大半の奴は子供だ。と言っても、俺の言う“子供”は見た目通り幼いか、もしくは見た目通り阿呆な人間の事だ。そう考えると、俺が今まで出会った事のある“大人”は、なんて少ないんだろう……。

ドン、と人間の足が俺の脇腹あたりにぶつかった。石に当てられた所だったから、ズキンと痛む。わざと蹴った訳じゃないらしく、それ自体の威力は大した事ではなかった。

「あつ、ゴメンね。大丈夫？」

とりあえず、俺は驚いた。俺に謝罪をする奴なんて初めてだったし、そのまま俺を抱き上げるなんて、どこまでお人好しなんだろう。

若い男だった。脇にスケッチブックとペン入れを挟んでいる。  
…絵描きか？

「血が出てるっ！？ まさか、僕のせい！？」

阿呆、んな訳ないだろ。どこの世界に、足に軽くぶつかったくらいで出血する猫がいる。

「ね、家に来なよ。傷の手当てくらいならしてあげるからさ」

余計なお世話だ。コラ、さっさと俺を放せ。

俺はその暖かい手から逃れようと何度か身を擦ってみたが、そいつはなかなか放してくれなかった。

「暴れないでよ。別に取って喰おうなんて考えてないよ」

もし考えてたら返り討ちにしてやる。

「……キミも、一人ぼっちなんだね。僕も一人ぼっちなんだ。僕ら、良く似てるね」

その言葉に、俺は人間に甘えようとしている自分に気付いた。我に返った、という感じだ。

俺はそいつの手に鋭い歯で噛み付いた。手加減なんてしてない、本気だった。

そいつは「痛っ！」と声を上げて俺を解放する。俺はそいつの顔を最後に引っ掻こうとしたが、思いとどまってそのまま裏路地の方へ走った。

同情が、大嫌いだった。同情なんてモノは、他人に自分を良く見せるための一つの手段だと俺は解釈してる。本当の優しさを以って

同情する奴なんか、俺は今まで見た事もない。

俺は裏路地を走った。走って、走って……。やがて、街灯だけが寂しく照らしている場所に辿り着いた。人の気配もなく、静かな場所だった。

「捕まえたっ！」

油断してたところに、また暖かい手が俺を抱き上げた。俺にしてみればそこその距離も、人間の足にしてみれば短いはず。けどそいつはずいぶん運動不足、または身体が強くないらしく、たったこれだけの運動で息を切らしていた。

「……たくもう、逃げないでよ。同情が嫌いなんだね」

たったあれだけの事で俺の心理を見抜くとは、只者じゃないかもしれないと俺は思った。

俺は多少なりもがき、尻尾を振って不満を訴えたが、そいつはもう二度と手放すかってくらいに強く俺を抱きしめていた。それこそ、一歩間違えば俺の骨が折れるんじゃないかと思うくらいだ。

「とりあえず、傷の手当をしなくちゃね」

そいつはやけに楽しそうに笑った。その笑顔に、どういう訳か俺の高ぶった胸の鼓動が小さくなった気がした。

……手当をしてもらったら、俺はすぐに出て行くからな。そう鳴くと、俺はその腕の中で目を閉じた。

暖かいな……。暖か過ぎて、なんだか火傷しそうだ。

そいつはまた、クスツと笑った。

## 第二部 春 「絵描きと黒猫」

### 2・春 「絵描きと黒猫」

俺は黒猫。世間に言わせりや“悪魔の使者”らしい。そんな訳で、この世に生を受けてから石を投げられたり、罵声を浴びせられたり、蹴られたりでなかなか大変な人（猫）生を送っていた。他猫との馴れ合いも嫌いだったから、俺を慰めてくれる奴もいなかった。

俺はいつも一匹だった。孤独には慣れていたし、むしろ望んでもいた。だが今は、俺の“飼い主”と呼ぶべきかもしれない変わり者が一緒にいる。

「おーい、朝御飯だよ！」

時々、どうしてだろうと疑問に思う事がある。どうして、俺はコイツと暮らしているのだろう、と。

初めて出会ったクリスマス夜の夜、俺は流れに身を任せてこの家に来て来た。家賃はいくらだろうと本気で考えてしまうような、ボロいアパートだ。まあその話は置いて、俺は傷の手当さえしてもらったらさっさと家を出て行くつもりだった。……そう、そのつもりだった。

初めて人の暖かさに触れた気がした。それに、そいつは「もし良かったら絵のモデルになつてくれないか？」とも言った。猫はすぐに恩を忘れる、と世間では言われてるらしいが、実際はそうじゃない。ただ、面倒で恩を返さないだけだ。俺も、例外じゃなかった筈だった。

「早く来ないと僕が食べちゃうよー!!」



多分、それは冗談で言ってるのではなく、本気だと思う。そいつは売れない絵描きで、本当に貧乏だった。栄養失調の如く、肌の色は悪いし、手なんて骨に皮がついているだけの様なモンだ。そいつは自分の食事を減らしてまで、俺に飯を分けてくれる。これにはさすがに恩を返さずにはいらなかった。

俺は「すぐ行く」と鳴くと、そいつの声がする台所の方へと駆けた。

もちろん、俺がここにいるせいでそいつの生活が更に苦しくなるって事も考えた。猫とは言え、三度の飯など色々金がかかる。だが、もしそいつの描いた俺の絵が売れば、生活が楽になるんじゃないかとも思った訳だ。売れるとは分からない。売れないだろう、というのが俺の本音だ。

それで、俺は未だに出しっぱなしの炬燵の上でじっと動かないで耐えていた。

「動くなよー……」

分かってるさ。

と言っても、どうしても動かずにいられないのが猫だ。気付いたら、前足で顔を洗っていた。

そいつは一瞬だけ眉を顰めた。が、俺がすぐに元のポーズを取ると何も言わなかった。

「出来たっ！」

数分後に声を上げ、そいつはスケッチブックとペンを片手に、後ろに寝転がった。

出来たのかい？　どれどれ、俺にも見せてくれよ。

俺は炬燵から飛び降りると、そいつの腹の上に着地（短い悲鳴を上げたが無視）して、そのままスケッチブックへと歩み寄った。

「見たいのかい？　あんまり似てないからも知れないけどさ」

そいつはスケッチブックを俺に向けた。ラフ画が、紙一杯に描かれていた。

最近、自分の姿を鏡で見えないから何とも言えないが、描かれたそれは確かに黒猫だった。眺めの少し荒い毛並、脇腹辺りの傷、鋭い目付き　なかなか細かいところまで描いてくれてるじゃないか。俺は喉をごろごろと盛大に鳴らし、感謝の意を示した。

「どういたしまして、ホーリーナイト」

そいつは、本当に嬉しそうに笑っていた。

“ホーリーナイト”というのが、どうやらこの俺の名前らしい。名無しというのも不便だったからその名前を付ける時に俺は何も言わなかったが、今にして思うと微妙なネーミングセンスだ。“聖なる夜”に出会ったからとか何とか言ってたから、そういう意味なんだろうか。

しかし、“ホーリーナイト”って呼び辛くないか？　しかも頑張ってもこの長いのを略す事は難しいだろ。“ホーリー”？　“ナイト”？　“ホナ”？　……ええい、まだるっこしい！

「あ！　そのポーズいいね。ちょっと描かせてよ」

人間で言う“考え中”というポーズをしていたらしい、どうやら。

まあ、確かに考え中だったんだけど。

そいつはまたスケッチブックとペンを持つと、目の色を変えて俺を見た。

……で？ また俺はこのポーズのまま静止？ このポーズで静止なんて、かなりキツいんだけど、ねえ？

「動かないでね」

無茶言っな。

俺は一つ、大きな欠伸をかました。

### 第三部 夏 「炎天の下で」

#### 3・夏 「炎天の下で」

俺も随分と器用な事ができるようになったモンだと、自分で驚いている。

片方の前足で身体を支え、もう片方の足でスケッチブックのページを捲る。次のページへ行っても、俺のしか描かれていない。つまり、殆ど真っ黒だった。次のページ同じように捲ってみる。やはり、同じ光景が広がっていた。

別に出来るようになったのはこれだけじゃない。ドアの開け閉めだつて出来る。閉めるのは簡単だが、開けるのが一苦労だ。ドアノブの上に飛び乗って、落つこちないように注意しながらノブを回す。そのままゆっくりとドアに体重を掛けてやるんだ。そしたら、二、三回挑戦してやっと開く。

「あ、コラ！ 勝手に見るなつて！」

そいつが慌ててやって来て、俺からスケッチブックを奪うように取ると、大事そうに旨に抱えた。いいじゃないか、少しくらい。けち。

「別にこの絵は売るつもりはないけど、せっかく描いた絵だからね。そんな事はしないと思うけど、破られたりしたらショックだから」

失礼な。破いたりするもんか。あんたがせっかく描いてくれた俺は、どうしてモデルの俺が破ける？ 俺を描いてくれた事、結構有り難く思ってるんだぜ。

そいつはスケッチブックをまだ出しっぱなしの炬燵の上に置くと、

奥の部屋に消えていった。かと思うと、すぐに出てきた。帽子を被り、脇にスケッチブックの紙一枚がすばい入ってしまう程の大きさの封筒を挟んでいた。

「行くよ、ホーリーナイト」

行くつて、何処へ？

その質問に答えずに、そいつは俺の目の前にドンとバスケットを置いた。猫くらいの大きさなら入れるくらいのサイズだった。嫌な予感がした。それを裏付けるかのように、そいつの手がゆっくりと迫って来た。

……おい、ちょっと待った。俺にこの中に入れて言うのか？  
いくらハーネスがないからつてそりゃないだろう！ なぁおい、考え直せよ！ こんな狭くて暗い所にいたら気が狂っちまうつて！  
なぁっ！！

待て、待てつてば！！ 話せば分かる、話せば分かるつてッ！！  
だから離してくれ！ 俺をこのまま家に置いて行ってくれ！！  
留守番をさせてくれ！！！！

はーなーしーてーくーれええええつ。

……死ぬかと思った、マジで。

狭いのも暗いのも想像した通りだったが、それ以外にも大きな問題が二つあった。

まず一つ、暑い。

季節は夏だ。ただでさえ俺は毛が長く、人間が毛皮のコートを着

ているようなくらいに暑い。それに狭くて通気性の少ない箱の中だときたもんだ。地球温暖化が進んでもう少し気温が上がっていたら、俺はぼつくりと逝ってしまっていただろう。

もう一つは、空気。

狭くて暗くて暑くて、おまけに空気が少ない。バスケットに入られてものの数分で息が苦しくなった。空気を求めて情報の僅かに漏れる光に向かって足を伸ばしても届かず、箱の木材は厚く、猫の爪では頑張っても空気穴を開ける事は出来なかった。

結果、このザマだ。俺はやつと外に出て、だらしなくのびている。

「ゴメンね、ホントにゴメン!!」

さつきからそいつが謝ってるが、俺は聞こえないフリをしていた。一々返事をしてやる気力すらなかったし、それが怒りの態度である事を表していたからだ。

通りの裏、俺たちはそこにいた。陰のある場所で一休みしようという事だが、俺の場合“一休み”じゃ済まなさそうだ。そいつが俺猫なんかにペコペコと頭を下げ続けている。他の人間が見たら（そこにはいなかったが）変な顔をし、変なヤツだなど思うだろう。

「今度から気を付けるからさ、許してくれよ」

今後……って、次はどうするつもりだ？ ハーネスでも付けるのか、それとも通気性の良いバスケットを買うのか？ 想像以上に、高い買い物だと思うぜ、どっちも。

俺はいい加減きこちない足で起き上がると、「大丈夫だ」と鳴いてやった。勿論、大丈夫なんかじゃない。本音は「気分が悪くて死にそうだ。家に帰って炬燵布団の上に丸まって眠りたい」だ。

「そっかア、良かった……」

そいつは良く俺の言う猫語を理解してくれる。そいつの前世が猫だったんじゃないかと疑う程だ。

「じゃあ、今度は炎天下に出るけど、いいかい？」

いいとも。ただし、ちゃんと影を作ってくれよね。

「うん。ちゃんと冷たい飲み物は用意してるよ」

おや、上手く通じなかったらしい。

別に訂正する理由もなかったし、良い事を聞いたから何も言わずに俺はそいつの腕に抱えられ、表通りに出た。人通りがなかなか多い。建物の陰で何か販売している者もいる。多分、そいつもその一人になるだろう。

「よい、しょつと」

そいつは道の隅の方に身体を寄せると、俺を地上に降ろした。そして自分も腰を降ろし、脇に挟んでいた封筒を手に持ち、開いた。中から取り出したのは、丁寧に描かれた俺の、黒猫の絵。俺も初めて見る物だった。いつの間にこんな絵を描いたのだろう。その絵の中の俺は、どこか笑っているようにも見えた。猫が笑う仕草など、人間には分かり辛い筈なのに。

そして商売は始まった……と思う。こういう商売は売り手がもつと道行く人に声を掛けたりするものだろうが、そいつは通行人に見えるように絵を立てて置いただけで、何一つ声を発さず、適当に目を泳がせていた。絵には何か小さな紙が取り付けられているが、俺は字が読めないから何と書いてあるかは分からない。恐らく、値札だと思う。値段はいくらだろう、と考えてみるが、相当な貧乏生活

のために想像も出来ない。とにかく売るために値段は格安か、生活費を多く稼ぐために高いか。後者だと、俺は思う。

絵を売る商売はいわば副業だ。本業はフリーターで、時々アルバイトに行つてはよく肩を落として帰つて来る。そういう場合は、「クビになつた」か「不採用」のどちらかの可能性が高い（他の場合の例は「店長にしかられた」などだ。それくらいでがっかりするなよ、と本気で思う。とことんネガティブな奴だ）。そいつは職を転々としていた。同じアルバイトなど、長く続いて一ヶ月程度だ。それでも家賃を払える程度の金は稼いでいる……らしい。

とまあそんなこんなで、既に二時間は経過しようとしていた。通行人は絵などに目もくれなかった。俺はそいつが持つて来てくれていた猫用の乾燥食品をぼりぼりと噛み砕きながら、ひそかに憤怒に燃えていた。らしくないと言えば、らしくないが。

「売れないねエ……。やつぱり一枚千円って高過ぎるのかな？」

そうなんじゃない？　けど、通行人は絵に見向きもしてないんだぜ。

「僕、才能ないのかなア……」

そう落ち込まれても困る。かと言って、俺じゃ大して励ます事も出来ない。

とりあえず俺はそいつの肩に飛び乗ると、そいつの頬を軽く舐めてやった。一応、励ましているつもりだ。

「フッフ、大丈夫だよ。心配掛ける事を言つてゴメン」

なら最初から言わないで欲しい　おっと。

落ち込んでる場合じゃないぜ。ほら、お客さん第一号だ。シケた



顔してないで、愛想笑いしろよ。

「……君が描いたのかね？」

老紳士風の男が、一枚の絵をじっくりと見ていた。眉間に皺を寄せ、難しい顔をしている。彼の次の言葉は、「上手」「下手」のどちらだろう。前者である事を、俺は心底願った。

「あ、はい。モデルは見ての通り、コイツです」

そいつが俺をその腕に抱き上げながら、老紳士に向けて笑みを浮かべた。が、彼はそんなそいつを見ようもしないで、絵を眺めていた。

そいつが息を呑む。俺も緊張してそのまま老紳士を見上げていた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「素晴らしい……。君の描いた絵には、人を惹きつけるような“力”がある」

「あ、ありがとうございます！」

……“力”ねえ。

本当にそんな“力”があるんだったら、たった五枚の絵なんてすぐに売り切れると思うんですが。

「五枚全部、頂きたい。代金は一万円出そう」

「あ……いえ」

老紳士が財布に手を伸ばした時、そいつが少し慌てたようにその手を止めた。

「申し訳ないのですが、御代は普通で結構ですので、一枚だけにしてもらえませんか？」

「ほう、どうしてだね？」

……何を言ってるんだお前、と俺は思わず叫んでしまった。本当にそう思ったのだ。

アンタの絵を買ってくれる人なんて、もしかしたらこの人しかないかも知れないんだぜ！ 金が少しでも欲しいんじゃないのかよっ！ 一万円出すって言うてるんだ、お言葉に甘えて一万円で五枚全部売ってやれよッ！！

「上手くは言えないのですが、もしかしたらあなた以外にもこの絵が欲しいという人が、後から来るかもしれません。僕は自分の絵を、出来るだけ多くの人に見てもらいたいんです」

よく分からん。なんとなく言いたい事は分かるが、本当に上手く言えてない。

「……ふむ、それならば仕方あるまい。では、この絵を頂こう」  
「ありがとうございます。千円になります」

俺はもう何も言わなかった。そいつの好きにすればいい、と思った。よくよく考えれば俺が口出し出来る事ではなかった。

老紳士が選んだのは、俺も一番出来が良いと思った、笑みを浮かべているような黒猫の絵だった。丁寧に放送されたその絵を持った老紳士がどんどんと離れ、小さくなって行く。

どこか、寂しかった。俺が描いた絵じゃないが、どういう訳か、寂しい感じがした。

その日は結局、その老紳士以外、誰もそいつの絵は買わなか

つ  
た。

## 第四部 秋 「絵描きのワケ」

### 4・秋 「絵描きのワケ」

そろそろ冷たい風が吹いてくるなど、俺は窓から紅くなりかけている山を見ていた。

秋は好きだ。暑過ぎる事もなく、寒過ぎる事もない。どちらかと言えば寒いのだろうが、自分の長い毛のおかげである程度の寒さなんてへっちゃらだ。　　つと、俺も随分と言葉遣いが変わったモンだ。“へっちゃら”じゃなく、“平気”だろ。……あいつの悪影響かな。

俺は今、留守番をしている。勿論、家にいるだけで何もしていない。ただ、炬燵布団の上でごろごろしていた。留守番がすっかり出来る猫がいるなら、是非会ってみたい。

あいつは今アルバイトに出かけている。初めての仕事だと言ってたが……こんなに朝早くに家を出るなんてどんな仕事なのだろう。時刻は4時を少し回ったところ。昼くらいには帰って来ると言ってたから　　そうか、新聞配達の種類だな。

何故猫の俺が色んな事を知っているのかと疑問を持つかも知れないが、別に不思議じゃない。野良猫だった頃、喰う物を探すために色んな家の屋根裏にもぐりこんでいた事も、何処かの工場にも住み着いていた事もあったからだ。おかげで色々興味深い事を覚える事が出来た（と言っても人間の事だから無駄知識に近いのだが）。

さて、これから俺は何をするかな。

少し考えては見たものの、何もする事もないし、ましてや出来る事もない。

俺は仕方なく、炬燵の中に潜り込んだ。

ガチャ、と部屋の扉が開かれた音が聞こえた。

あいつが帰って来た。いつもなら「ただいま」と言うのだが、またまた落ち込んでいるらしく、そのままのそのそと歩いて来た。

俺はとりあえず「何処に行ったんだ」と捜されないように炬燵の外へ出ると、そのまま布団の上で丸くなった。いつものパターンだとすれば、もうすぐ「ホーリイナイトオ〜……」と今にも泣き出しそうな声がするはず。

「ホーリイナイトオ〜……」

そら来た。

「またバイトをクビにされたよう」

はいはい、今度は何をしたんだ？

「新聞の束を溝に落つことしただけなのに、『お前なんてもうクビだーっ！』って」

……そりや仕方ないだろ。

こういう時の俺の仕事は、そいつの好きなようにさせてやる事、かな。そいつは俺を捕まえると、頬ずりしたり、たぶたぶした首を触ったりする。多少我慢ならない所があるが、それを我慢するのが男ってモンだ。

「しかも何にも役に立ってないからって、バイト代を一銭もくれなかったんだ」

それも仕方ない、潔く諦めろって。

しかし……あんたも随分とマヌケなんだな。これで何度目だ？  
バイトがクビになるの。

「あゝあ……こんな事なら家を飛び出すんじゃなかったな」

お？

「僕の実家、畳屋をやっててね。高校を卒業したら僕がその家業を  
継ぐ事になってたんだ。だけど、それには僕の夢　絵描きになる  
って事を諦めなきゃならなかったんだ。……嫌だった。『自分の人  
生だから、自分で決める』って格好つけて家を飛び出したのも、二  
年前くらいの事。もし、僕が家業を継いでいたら、夢を諦められた  
ら、ひもじい思いをせずに良かったのかな」

“もしも”なんて考えてたらキリがないぜ。

「……これで良かったのかな？　僕の人生」

これはあんたが選んだ道。俺がどうこう言う権利もないし、言っ  
たところで伝わらない。

だけどさ、まだその取り返しは付くんじゃないか？　今からでも、  
実家に帰って両親に一言謝れば、許してくれるかもしれないぜ？

「　彼女、どうしてるだろ？」

それはあんたの恋人を指すのか、それとも他の女性を指すのか、  
どっちだ？

「僕の恋人……だった人。今は違うよ、多分」

その多分ってどういう意味だよ。

などと色々、そいつの言葉の跡に反応して鳴いたりしたが、そいつは俺の言葉など聞いていなかった。ただ坦々と、遠い目で、独り言のように呟いていた。

やがてそいつの手から解放された俺は、そいつの目を見た。

一粒の涙が、零れ落ちていた。

その涙が誰のためのものだったのか、無論、俺には知る由もなかった。

## 第五部 二度目の冬（前編） 「最期の頼み」

5・二度目の冬（前編） 「最期の頼み」

雪が降っていた。 あの日と同じように。

俺は炬燵布団の上でごろごろとしたまま、窓の外の雪を眺めていた。さっき降り出したばかりだが、もう木の枝や葉が白色の染め上げられている。今年の雪も積もりそうだ。

一年。あいつと初めて会った日から、早くも一年の歳月が過ぎ去ろうとしている。時が経つのは本当にあっという間だった。今でもまるで昨日の出来事のように、鮮明にあの日の事が思い出せる。

冬は嫌いだ。俺はそう心の中で呟くと、布団の上で更に丸まった。寒くて、冷たくて、そして寂しい冬。

だけど今年は、炬燵の中でずっと丸まっていられる（とは言っても電気が止められていて暖房器具としての役割は果たしていないが）。悪いけど、冷たいけど、主に外で生活していた野良の時よりずっとマシだ。それにあいつがいてくれるから、寂しくもない。いや、あいつがいるだけで、冬でも暖かく感じる。

「うわぁ、寒い寒いつ！！」

そう言ってそいつは部屋に駆け込むや否や、まっすぐに炬燵の中に足を突っ込んだ。しかし悲しいかな、その中は外の温度と大差はない。

「うっ……。ホーリーナイト、寒くないの？」

そりゃ寒いさ。出来れば炬燵の電源を入れて欲しい。なんてな。そいつは丸まっている俺を見て、クスツと笑った。



「あ、今あったかい炬燵の中で丸くなりたいって思った？」

お、いつになく鋭いな。

「ハハ、凶星って感じだね」

そいつは再び笑った。俺も愛想笑いのつもりで、一声鳴いた。

楽しく、暖かかった日々が突然崩れ去った。

俺が玄関先で用を足した後、部屋に戻って再び炬燵布団の上で丸くならうとした時、何かが倒れる大きな音がした。嫌な、予感がした。

俺はすぐさま音のした方へ駆けた。小さな台所の前で、そいつが倒れているを見た。

勢い良くそいつの身体に飛び乗り、そいつの頬を舐めた。反応はない。

冗談じゃない。ただの貧血なのか、それとも。とにかく、俺はそいつが何か反応するまで頬を舐め続けた。

数分経過した頃だろうか、そいつが唸り声を上げながらゆっくりと目を開いた。状況が理解出来ないという感じで、虚ろな目で俺を見た。

「あれ……？」

惚けた声を出すな。本当に心配したんだ。

「ん……ああ、ゴメンね。何か心配掛けちゃったみたいで。僕は大丈夫だよ。布団の中でゆっくり眠ってれば、すぐ治るよ……」

俺はどうするか悩んだ。恐らく、そいつは貧血の類なんじゃない。医者にちゃんと診てもらうべき、何かしらの病気だ。だが、病院に行く金なんてないし、それより病院へ行く手段もなかった。このアパートから病院までの距離はざっと10kmくらい。どうやってそいつを病院まで運ぶのか……猫の俺には所詮無理な話だ。せめて俺が人間だったならば。

“たら”“れば”は置いといて、他に方法がないのなら、俺がやるしかない。

しかし、この俺に何ができる？ “悪魔の使者”である黒猫一匹、一体何ができる？

それでも、やるしかないんだ、俺が。

俺はその場に居ても立つてもいられず、玄関の扉の下に付いている猫用の扉を通して外に出た。真っ白な銀世界が広がっていた。

……さて、行くか。

俺は、雪が降り注ぐ中を駆け抜けた。

部屋に戻った時には、俺は傷だらけだった。

久しぶりに痛みを味わったが、やはりまだ慣れてしまっているようだ。前足から流れ出ている血を見ても、何とも感じない。

俺はまず薬屋に行った。いや、襲ったと言うべきか。病院に行

つても医者と呼ばやしないし、薬を奪取する事も難しい。薬屋なら棚に堂々と置いてある。どうぞ取って行ってくださいとばかりに。

盗みは昔からしょっちゅうやってたから手際が良かった。客がレジの店員から受け取った薬の入ったビニール袋を奪った。とても褒められるやり方ではない。その客の顔にいきなり飛び掛り、自慢の爪で引つ掻いてやった。怯んだその一瞬の隙を突いて、俺はまんまと薬を手に入れた。が、世の中そんなに甘くはない。店を出た直後、俺は後ろから投げられた石をぶつけられた。俺はその痛みを我慢した。我慢しなければならなかった。

俺はビニール袋を口に提げたまま、走った。そして八百屋の前で立ち止まると、再び犯行に及んだ。店員の死角に忍び込むと、ビニール袋を一旦地面に置き、台に堂々と並べてある食料を袋の方に落とす。それを器用に袋に入れ、そしてそそくさと店員に気付かれないうちに走った。多分、これまでやってきた盗みの中で、一番手際が良かったんじゃないかと思う。

そして、帰路で子供達に意思を投げられまくって、今に至る。

俺は真っ直ぐにあいつの元へと向かった。汚れた足跡には血も付いている。掃除が大変だと言っていつもなら怒られるが、今は別だ。掃除なら、後でちゃんと俺がしといてやる。

布団の中に、そいつはいなかった。そいつは、椅子に座って机に向かっていた。

ブチツと音がして、ボロボロになったビニール袋が破けて中に入っていた物が盛大に床の上に転げた。そいつは今まで俺に気付いていなかったらしく、その音に一瞬びくつと身体を震わせた後、ゆっくりと俺に向き直った。酷く、顔色が悪い。

「傷だらけだね。初めて出会った時と同じだ……」

何してる。『ゆっくり休めよ』と、そう言っただろ。

俺は半ば怒りに満ちていた。それは、そいつにとっても同じ事だったのかもしれない。俺が盗みを働いてきた事は、ビニール袋から転げた物を見れば一目瞭然。悪い事はやってはいけないと、そいつは良く言っていた。

「これで……おあいこだよ」

そいつは俺を見て、ニツと力なく笑った。そして椅子からゆつくりと立ち上がると、俺に向かって歩み寄る。覚束ない足取りで、何度も身体が倒れそうになる。それでもそいつは、俺の事をしっかりと見つめていた。

「……たった今、書き終えたんだ、この手紙」

そいつは俺の目の前に、一通の手紙を差し出した。

「いつか、話したろ？ 僕には恋人がいたって。その恋人とはね、僕はろくに話もしないまま故郷を飛び出してきたんだ。もしかしたら、って思っただよ。彼女はまだ、僕を想ってくれてるのかなあ …… って。 …… そんな彼女に宛てた手紙なんだよ、コレは」

……だから、何だよ。

「……コレを、彼女に届けてやって欲しいんだ。僕の故郷は、ここからかなり離れてるけど、ホーリーナイト…… お前なら僕の頼みを聞いてくれるよね」

どうしてそんな頼み事をするんだ。そんなの、あんたが元気になつてから直接渡してやればいいじゃないか。普通に郵便で出せばいいじゃないか…… なあっ！

そいつは哀しげな表情を浮かべたまま、手紙を俺に差し出したまま動かなかった。

その瞬間、俺はそいつの気持ちを悟った。自分がもう長くないって事に、自分で気がついたんだ。自分が死ぬその様を俺に見られたくない。そして、また俺が一人ぼっちになるのを哀れに思ったんだな。

バカな奴だ。俺の心配なんていいから、自分の心配をしろよ。

「……頼むよ」

俺はその手紙をそつと口で銜えた。そいつがまた力なく、けれども嬉しそうに笑う。

不吉な黒猫の絵なんて売れなかったのに、それでもあんたは俺だけ描いた。俺のためが故に、あんたは酷く痩せ細り、辛い病気に掛かってしまった。

そんな俺があんたに恩を返せるとしたら、コレしかない。もっと違う形で恩を返したかったが、それは叶わないようだ。

俺は前足で盗んで来た食料や薬を差し、催促してやった。そいつはただ一度、小さく頷いた。

俺はそいつにゆっくりと背を向けた。そして、一声、大きく鳴いた。

手紙は確かに受け取ったと。

## 第六部 二度目の冬（後編） 「この日のために」

6・二度目の冬（後編） 「この日のために」

雪が降る山道を、俺は駆け続けていた。

『丁度山を越えた所にある小さな村の、青い屋根の家』とあいつは言っていたが、何が何でも説明不足だ、と今になって思う。だからと言って詳しい説明を聞くために元来た道を戻ろうとは思わないが、多少なり不安だ。

どれくらい走っただろう。疲労のせいで時々目が霞み、立ち止まって休みたくもなる。

だが、俺は立ち止まらなかった。立ち止まりたくなかった。あいつは今、瀕死の状態だ。そんなあいつを救ってやるには、俺がこの口に銜えている手紙を一刻も早くあいつの恋人の元へ運ぶしかない。後はその恋人が、俺を“悪魔の使者”と見るか否かだ。

「見ろよ、“悪魔の使者”だ」

「目障りなんだよなあ、シッシッ」

そう言っつて、二人組みの子供が同時に石を投げて来た。回避する事に体力を使いたくなかったが、そんな事に関係なく、俺の身体は避ける事もしなかった。一発、後頭部に直撃し、一瞬視界がブラックアウトする。それでも俺は走り続けた。

好きなだけ罵声を吐けよ。好きなように呼べよ。……俺には、あいつの付けてくれた大切な名前があるから。

“ホーリーナイト”

“聖なる夜”とあいつは俺の事を呼んでくれた。

優しさだつて温もりだつて……みんな詰め込んで呼んでくれた。  
他人にとっては意地汚い黒猫でも、“悪魔の使者”であろうとも、  
あいつにとって俺は“聖なる夜” “ホーリーナイト”なんだ。  
俺が俺である意味なんて、俺がこの世に存在する意味なんて、それ  
で充分なんだ。  
もしも、生まれてからずっと世間に忌み嫌われてきた俺に生きて  
いる意味があるとすれば、恐らく、この日のために俺は生まれて来  
たんだと思う。今なら本気で、そう思える。

どこまでも どこまでだつて……走つて見せる。

俺は、心臓がズキズキと痛むのも無視して、更にスピードを上げ  
た。

突然の不意打ちに、俺は何もする事が出来なかった。

もう少し早くに危険を感知するべきだった。視界に手に何かを持  
った人間が映ったその瞬間に、その手に持っていた物が何かを、悟  
るべきだった。

鋭い音と共に、一発のBB弾が俺の左目を奪った。一瞬左目に映  
ったのは赤色だけで、すぐに何も映らなくなった。今まで味わった  
事のない、激痛だった。

「よっしゃ、命中っ！」

「さすがだな。けど、少し可哀相じゃないか？ こんなトコ警察に  
でも見付かったら、動物虐待で捕まるぜ」

「何言つてんだ、見つかりゃしないさ。それに相手は“悪魔の使者

”なんだぜ？ 動物以下の存在だ”

「……それもそうか」

「フン、結構威力の高いエアガンだろ？ アルミ缶程度なら撃ち抜ける、俺特製のエアガンだぜ」

何か生暖かい液体が、左頬を伝う感覚が何とも気持ちが悪かった。エアガンを持った男なんて無視したかった。そのまますんなりと道を通して欲しかったが、それは叶わぬ願いだった。

俺が再び走り出す前に、そいつらが俺を取り囲んだ。ガシャン、と何か音が上から聞こえた。弾をリロードする音だという事に気付いたのは、もう一発。今度は額に喰らってからだった。近距離からの発砲は、それだけで皮膚が弾けるのではないかという錯覚をさせる。

「……もう少し遊んでやるか？」

「蹴り殺すに一票」

「いや、ここはもう逃がしてやったら」

「お前は黙ってる」

そのグループにも一人、少しは良い奴がいるようだが、恐らく俺を助けてはくれないだろう。

エアガンで撃たれ、蹴られ、そして踏まれて揉みくちやにされて……。それでも俺は口に銜えた手紙を離さなかった。その手紙を離してしまつたら、あいつを裏切ってしまうような気がしたからだ。裏切りたくはない、俺はこれからずっと、あいつと“親友”でいたかった。

やがて攻撃が止んだ。薄っすらと開けた目に映ったのは、近付いてくる男の手だった。

「コイツ、手紙なんて銜えてやがる」



親友との約束を、奪われるワケにはいかない。

俺は力を振り絞って起き上がると、近付いてきていた手に飛び乗り、続け様にその男の顔まで飛んだ。そして二度とその傷跡が消えないようにと、そいつの顔を力一杯引つ掻いた。皮膚どころか肉までも切り裂く嫌な感覚が爪を伝う。

「ぎゃああああっ!!?」

品のない悲鳴だ、と引つ掻いた男を見ながら思った。

俺はそのまま着地すると、全身を駆け巡る激痛を我慢し、逃げるように走り出した。口に手紙を銜えたままだ。痛みを我慢する時に歯を強く食い縛ったから、もしかしたら手紙に俺の歯型がくつきりと付いてしまったのかもしれない。けどまあ、読めたら良いよな? あいつらは追って来なかった。わざわざ追い駆けてまで俺と“遊び”たくなかったようだ。俺にしてみればラッキーだ。

俺はもう後ろを振り返らないようにして、先を急ぐ事にした。

山頂の付近、下が見下ろせる場所で俺は一旦立ち止まった。

村が見えた。小さな村だ。右目を凝らしてよく見ると、奥の方に一軒だけ、青い屋根の家があった。そこが多分、あいつの恋人の家だ。

もう少しだ。もう少しで、約束を果たせるんだ。

横には村へと続く長い峠道があったのだが、俺は最短ルートを進む事にした。山を、急な斜面を駆け下りるルートだ。道なんて呼べるものじゃない。遠回りする体力がなかったのが、一つの理由だ。

俺は半ば滑り落ちるようにして斜面を駆け下りた。立ちはだかる木々に何度もぶつかった。足を木の根に取られて、最後は転げ落ちた。全身ズタボロだったが、何とも村に辿り着いた。

既に満身創痍の俺は、手紙を銜えて歩くだけで精一杯だった。一歩、そしてまた一歩踏み出す度に、身体はどこから流れ出る血が落ちる音が聞こえた。どこから流れ出る血なのか確認するために身体をくねらせたり、捻ったりも出来ない程、俺の体力は限界に近づいてきていた。ただ歩く。それしか出来なかった。

小さな村とは言え、人が全くいない訳ではない。さっきから何人も擦れ違い様に俺を見ては眉を顰めている。それでも攻撃を加えるつもりはなかったようだ。……少なくとも、擦れ違った大人たちは

「……小汚い黒猫め、そんな血だらけでこの村に何しに来た！」

「お前の血でこの村の地を汚すんじゃないっ！」

「“悪魔の使者”め！」

「この村から消え失せろ！！」

子供の数は、五、六人だろうか。正確な数の確認が出来ない程に、俺の右目に映る物全ては霞んでいた。

立ち上がる間もなく襲い来る罵声と暴力は、躊躇なく俺の命を削っていく。

どうして、黒猫は忌み嫌われるんだろう。

どうして、俺はこんな目に遭わなきゃならないんだろう。

どうして、俺は黒猫なんだろう。

……その疑問に答えてくれる者は、誰もいない。

「死ねよっ！」

右目に、銀色に光る何かを振り上げた子供が映った。……ナイフのような物だった。

ここまでなのか？ 俺があいつのために出来る事は、たったここまでの事なのか？

畜生、と鳴いたつもりが、上手く鳴き声にならずに唸り声のまま風に流されて消える。

……ゴメン。俺、どうやら約束……果たせそうにない。

死を覚悟した、その瞬間。

「止めなさい！！」

若い女の声がした。俺にしてみれば、それは天使の声だった。

「あなた達、命を何だと思ってんのよっ！！」

「げ、五月蠅い奴が出て来たぜ」

「コイツは黒猫だぜ？ “悪魔の使者” なんだぜ？ ……殺して何が悪い？」

「私から見ればあなた達こそ“悪魔” よ！！ 寄って集って、罪のない黒猫を虐めて！！」

「罪のない、だと？ そいつは生まれたその時から」

「この子が好きで黒猫に生まれたと思ってんのなら大間違いよっ！

！ とにかく！ これ以上この子を虐めるつもりなら……っ！！」  
「……チッ」

状況が良く分からないが、俺の耳に聞こえたのは毒気吐きながら遠ざかっていくいくつの足音。どうやら、俺は命拾いをしたらし

い。

若い女が俺を抱き抱えた。そして優しく、俺の頬を擦った。

「すぐに病院に連れて行ってあげるからね」

それを聞いて俺は安堵したのか、俺の意識は女が俺を抱えて走り出した所で途切れた。

## 第七部 二度目の春 「Holy Knight」

### 7・二度目の春 「Holy Knight」

車のエンジン音に、俺は目が覚めた。

……相変わらず状況が理解出来なかった。俺は自動車の助手席に乗せられていて、運転席には若い女の姿が見える。左目には何も見えず、どうやら本当につぶれてしまったようだ。他の傷はというと、まるでミイラのように全身が包帯でぐるぐる巻きにされている。応急処置なのか、それとも獣医の手当てなのか、動物病院に行った事のない俺には分からなかった。

どうやら俺は生きているらしい。何とも、実感が沸かないが。なああんた、少し状況を説明してくれないか？

「あ、良かった。目が覚めたのね」

女は横目で俺を見ると、ホッとしたように息を吐いた。

「お腹空いたでしょ？」

と、彼女は車を一旦停車させ、後部座席に置いてあった紙袋から箱を取り出した。パッケージには綺麗な毛並の雌猫と乾燥食料の写真が印刷されている。“きゃつとふーど”と呼ばれる食料である事は、あいつから教えてもらっている……？

俺はハッと気が付いた。というより思い出した。

……一刻も早く例の手紙をあいつの恋人の元へと届けなければならなかったんだ！

その前に、手紙は何処へ行っただんだ！？

「そんなに鳴かないでよ。君の持ってた手紙なら、ちゃんと受け取ったからね」

は？

「宛名が私だったから、勝手に読んじゃった」

彼女は箱から食料を取り出す手を止めると、自分の胸ポケットに入れていた手紙を手に取り、俺に広げて見せた。俺の歯型もくつきりと残っている。確かに、それはあいつの手紙だった。

宛名が私だったって……あんたが、あいつの？

……偶然ってあるモンなんだな。いや、運命か？ まあ、偶然と運命の境は微妙なのらしいが。

「ねえ」

彼女が目には涙が浮かべながら、俺の目の前に乾燥食料を入れた容器を置いた。

「あの人……死んじゃったの？」

俺は、その問いに答えなかった。答えられなかった。

あいつが何か重い病気に掛かったという所までしか、俺には分からない。今生きているのかも、そして死んでいるのかも、分からない。ただ、あいつはそう感嘆には死なないと信じていた。数年間、栄養失調の貧乏暮らしをしていたんだ。そう簡単に、死ぬ訳がない。あいつがその手紙に何を書き、何を彼女に伝えたかなんて知らない。知る由もない。

俺はとにかく、空腹を満たすために食料の入った容器に頭を突っ

込んだ。

「……そっか、君も知らないんだね。じゃあ、一緒に行こうか。あの人の所に」

そう言うと、彼女は再び車のエンジンを掛けた。

「あ、ええと何てゆーか……その……ゴメンナサイ」

そいつは病室のベッドの上で正座し、深々と俺と彼女に向かって頭を下げた。

ここまでの経緯を簡単に話すと、俺と彼女はいいつの住んでいたアパートへ行った。が、部屋は綺麗にもぬけの殻で、もう葬儀が終わったのかというくらいに（少なくとも俺は本気でそう思った）片付いていた。出しっぱなしだった炬燵布団もなかったし、あいつの持っていたスケッチブックもなかったからだ。

しかし、大家に改めて話を聞いたところ、危険な状態だった所を訪ねて来た一人の老紳士に発見され、あいつは病院に運び込まれたらしい。そこで俺と彼女は同時に安堵した。

それで、栄養満点（？）の点滴を受け、病人食もきっちり摂って元気になった状態が、今だ。見る限りぴんぴんしている。顔色も、今まで見た事もないくらいに良かった。

頭を下げたまま動こうとしないそいつに、彼女はゆっくりと近付くと顔を上げさせる。そして二人の目と目が合った瞬間、彼女がそいつの胸に飛び込んだ。

「良かった……ホントに……っ！　あなたが手紙で変な事書くから、心配したじゃない!!」

「ゴメン、悪かったよ。けどさ、僕も本当に危なかったそうなんだよ。僕が今こうして生きていられるのは、運が良かった　　じゃなく、先生のおかげさ」

「お医者さんね。私からもお礼言わなくちゃ」

「いや、その先生じゃないんだよ。確かに直接助けてくれたのはその先生なんだけどね」

「じゃあ、あなたを病院まで運んでくれた、老紳士の事？」

「そうそう」

「その人が、何で先生？」

そいつは嬉しそうに笑いながら、彼女を自分の胸から離れた。

「それがさ、その老紳士……プロの絵描きだったんだよ。一度僕の絵を買ってくれた人でさ、もう一度僕に会いたって街を捜し歩いてたらしいんだ。それで何とかして僕の住所を突き止めて、中に入ってみたら　　って感じで」

そいつはまた、嘘のような奇跡の話だ。

「その人、僕の絵の才能を高く買ってくれてね。『もし良かったら私の下で絵を描かないか？　勿論、生活費などは私が援助するよ』って言うてくれたんだ」

「それじゃ　　」

「おっと、喜ぶのはまだ早いよ。先生、僕から買った絵を勝手に何かのコンクールに出したんだ。それがなんと、見事に入賞！　ほらっ！」

そいつはテーブルにおいていた雑誌の切抜きを彼女に見せた。俺



も見たが、何が書かれているのかは字が読めない俺には全く分からなかった。が、小さく黒猫の　俺の絵が、写真に映っていた。

「その賞金は当然、この入院費に当てられる事になったんだけどね」

そいつは苦笑して頭を掻いた。

「ま、ちょっと変な形になっちゃったけど、ようやく僕の夢は叶ったんだ。子供の頃からずっと夢見てきた、絵描きになるって夢が

……」

「……おめでとう」

「ありがとう。これも全て、僕の我俣を聞いてくれた君のおかげだよ……」

二人が目を閉じ、お互い顔を近づける。これはもしかして　。  
すっかり存在を忘れられてる俺は、勿論不満だった。だから、邪魔してやった。

フ　　というのは相手を威嚇する時などに良く使う。だからこの場合では少々使いどころが間違っている気がしたから、俺の存在を思い出させてやるという意味で、盛大に喉をごろごろと鳴らした。唇と唇がもう少しでって所で、二人が同時にビクツとして俺の方を見る。

「……ゴメンゴメン、君の事すっかり忘れてた」

彼女が笑う。

「……この傷、どうしたんだ？」

何を今更。

「あなたが無茶させるからよ。あのアパートから私の家まで走らせようなんて。子供達に虐められてるところを私が助けなきゃ、今頃どうなってたか……」

「……ゴメン、本当にゴメンね、“ホーリーナイト”。でも、“聖なる騎士”である君ならやってくれると信じてたんだ」

「騎士？」

……騎士？

「あれ？ 手紙に書いてなかったっけ？ “ホーリーナイト”の意味は“聖なる騎士”だって」

「そうだっけ。手紙には『クリスマスの夜に出会ったから』とか書いてあったから、てつきり“聖なる夜”の方なのかと」

「“聖なる夜”って、普通に考えたら妙な名前だなんて思わなかった？」

「一体何の話をしてるんだ？ 俺の名前 “ホーリーナイト”って、ホントはどういう意味なんだよ。」

俺はついに、教えてくれーっ、と鳴いてしまった。

「k”だね」

“k”よね」

二人同時に言い、同時に笑った。

ますます意味が分からない。さっぱりだ。おい、ちゃんと教えてくれよ、なあ！

俺はそいつのベッドの上に飛び乗ると、そのまま丸くなり、尻尾を振った。

季節は春。

桜の花びらが舞い、つくしが顔を出し、そして何より暖かい春。

俺はそんなこの季節を、前よりほんのちょびっとだけ、好きになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9024m/>

---

k

2011年10月7日15時19分発行